

外国にルーツをもつ子どもたちへの支援

人間科学部 コミュニケーション学科 4年 前嶋千穂
チェンマイ・ラチャパット大学

1. テーマ設定の理由

私が今回の留学で取り組んだSDGs課題のテーマは「外国にルーツをもつ子どもの支援」です。私のテーマはSDGsの「4. 質の高い教育をみんなに」に関連しています。私がこの課題に関心をもった理由は、私は将来英語教員になった際に役立てられることをテーマにしたと考えたからです。また、近年、日本では日本語の指導が必要な児童生徒が増えているのでそのような子どもたちにどのような支援や指導ができるかどうかを調べたいと思ったからです。私は大学で授業を受けている際に外国にルーツがある子どもたちが在籍している小学校の動画を視聴しました。私はこの動画を視聴して日本語の指導が必要な子どもたちがいるという事を知りました。日本でもこのような子どもたちを支援するための学級や日本語学校があります。しかし、私は日本での取り組みだけではなく、タイでの取り組みを調べることで支援の選択肢が増えると思いました。また、タイの周辺にはマレーシアやカンボジア、ベトナムなどの様々な国があり移民や外国にルーツをもつ子どもたちも多いと思うので、タイで行われている支援について調べ、日本でも実施できるような支援や指導の方法について調べたいと思いました。

2. タイで調査したこと

私は留学先でタイでの語学の支援についてインタビュー調査をしたり、インターネットで調べたりしました。インタビューではチェンマイ・ラチャパット大学の日本語学科の川合先生に日本語の支援を必要とする児童生徒への接し方やチェンマイやタイで行われている語学の支援についてお話を聞きました。また、チェンマイ・ラチャパット大学付属の小学校には取り出し学級などの外国にルーツがある児童生徒の言語支援をする学級がなかったので、川合先生の経験をもとにお話を伺いました。まず、学校とインターナショナルスクールでは言語を教える目的が異なるため、支援の方法や内容が異なる可能性があるという事を教えていただきました。また、タイでは外国人の子どもたちが現地の学校に編入する際に、年齢は関係なくタイ語の能力を見て学年を決めるということを知りました。例えば、日本では小学4年生だった子どもたちがタイに来て全くタイ語が分からない状況で小学校に編入すると小学1年生のクラスに入ることがあります。このような状況だとクラスに馴染めない子どもも出てくるそうです。このような子どもたちに対して支援をしていく方法をいくつか教えていただきました。例えば、その児童生徒の母語の言語を調べて話しかけてあげたり、その子の好きなことや得意なことを聞いてあげたり、寄り添ってあげたり、クラスの子どもたちと交流する機会を作ってあげたりすることが大切だということを知りました。その子どもの好きなことや得意なことを伸ばしてあげることで、その児童生徒の自己肯定感やモチベーションを高めることに繋がります。一方で、児童生徒一人ひとり家庭の事情やバックグラウンドが異なるので、接し方に注意する必要があるということを知りました。それから、その子どものニーズに応じてあげることも学びました。例えば、子どもが「日本語ができるようになりたい」といった時は、具体的にどういう所で日本語が使えるようになりたいのかを

深く掘り下げてあげて、日本語を勉強する目的を具体化させてあげる必要があります。そして、小さな成功体験を積み重ねたり、できるようになったことをクラスの皆に発表して大きな成功体験を経験させてあげることも大切であると教えていただきました。そうすることで、クラスの子どもたちがその児童生徒に話しかけてクラスの輪に入るきっかけにもなると思います。また、学校では取り出し学級といった日本語の支援を必要とする子どもたちに日本語を教える学級もありますが、川合先生は取り出し学級と通常学級でやっていることをシェアすることが大切であるということを教えてくれました。それぞれの学級で取り組んでいることを児童生徒たちで共有することでお互いを理解することに繋がるそうです。

それから、チェンマイのショッピングモールの中に「We Learn Thai」という語学スクールを見つけたので、その語学スクールのホームページについて調べました。この語学スクールでは会話を中心にタイ語を学んでいくスタイルでした。掲載されている写真には主に大人の外国人の受講者が写っていたので子どもの受講者がいるのかは分かりませんでした。身近なところにタイ語を学ぶことができる施設があることは分かりました。また、インターネットで調べてみるとチェンマイには「TSLチェンマイ」といったタイ語を第二言語として学ぶための教育機関がありました。そこでは、習得のレベルによって授業を受けたり、マンツーマンで指導を受けたりすることができるようです。また、この学校も大人の方々が多く受講しているようなので児童生徒向けの団体ではないかもしれません。

3. 調査結果から考えたこと・日本との比較

私は調査結果から外国にルーツがある子どもたちとの関わり方が重要だと思いました。外国にルーツがある子どもたちで日本語の支援を必要とする児童生徒のニーズに応えたり、学校内に安心できる居場所を作ったりすることで彼らがより充実した学校生活を送れるのではないかと考えました。また、川合先生の「子どもたちのできないことを伸ばすよりも好きなことや得意なことを伸ばしてあげることが大切」という言葉もとても印象的だったので、子どもたちの長所を伸ばしていけるように支援をするとともに子どもたちの異文化を理解する機会を設けていきたいと思いました。また、児童生徒一人ひとりの性格やバックグラウンド、家庭環境も異なるのでそれらを考慮しながら、子どもたちへのアプローチの方法についても考えていきたいと思いました。

茨城県では県内の公立学校に通う外国にルーツをもつ子どもたちの日本語指導や進路ガイダンスなどを行っている「茨城NPOセンター・コモンズ グローバルセンター」という地域で活動する団体があります。また、タイでも「We Learn Thai」や「TSLチェンマイ」といった言語支援をする団体がありました。それから、日本とタイの相違点として、日本とタイでは外国から帰国した児童生徒が学校に編入する際のシステムが違います。タイの学校ではタイ語の習得度に応じて学年が決まるので言語を習得していく観点から見ると言語を学ぶ機会があるように感じますが、年齢の差を考えるとクラスに馴染みにくいのではないかと思います。また、日本では年齢に応じて学年が決まるので、同年齢の子どもたちと授業を受けたりすることができるが、日本語の支援が必要な児童生徒にとっては言語の壁を感じてしまったり、クラスの輪の中に入れるかどうか課題になったりしそうだと思います。また、日本で日本語の支援をする生徒に指導をする場合は、言語の習得度に配慮する必要があると思います。

4. 茨城や日本の教育に活かせること

茨城県では外国にルーツがある子どもたちのために活動している団体があったり、取り出し学級を実施している学校があったりします。しかし、高等学校では取り出し学級を実施している学校がほとんどないので、そのような学級がない学校で外国にルーツがある子どもたちをどのように支援していけばいいのかを考えました。私は、地域の言語支援をする団体や教育機関と連携を取りながら支援をすることを提案したいと思います。茨城県では学校に取り出し学級を設置している学校がほとんどないということから、学校での外国にルーツをもつ子どもたちへの支援が十分にできていないのではないかと思います。そこで、地域の言語支援団体と協力することで支援の方法についてアドバイスをもらったり、子どもたちが安心することができる居場所を見つけたりすることができるのではないかと思います。そうすることで、日本語の指導について悩んでいる先生も団体の方々に相談できるのではないかと思います。また、地域の教育団体と協力することで、地域全体で外国人への支援の輪が広がっていくのではないかと思います。

(3283 字)